

「源氏の心ゆだすき」と「源氏六十三首の哥」

今井，源衛

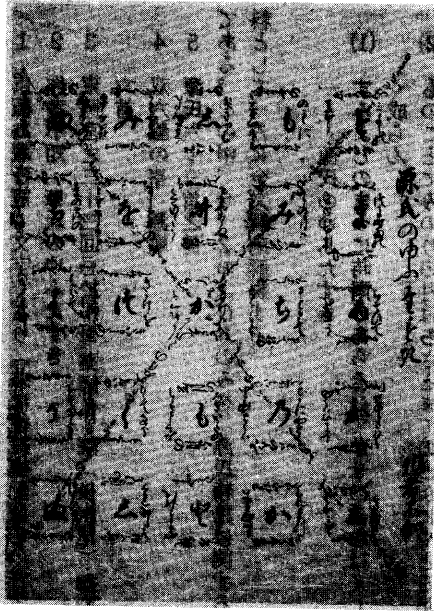
<https://doi.org/10.15017/12231>

出版情報：語文研究. 25, pp.1-8, 1968-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

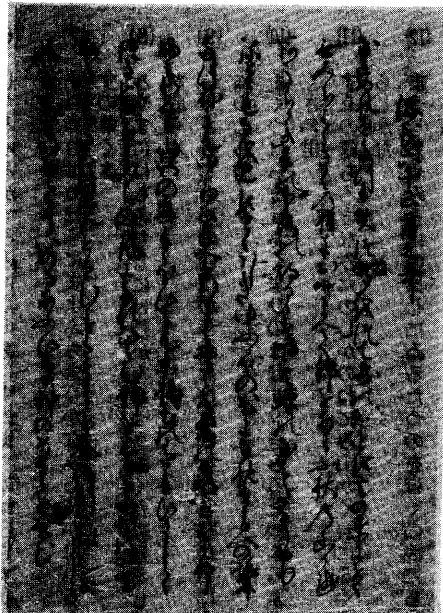
〔新資料紹介〕

「源氏のゆふたすき」と「源氏六十三首之哥」

今井源衛



源氏のゆふたすき



源氏六十三首之哥

島原松平文庫に「堅横和歌」と題する一本がある。「尚舎源忠房」「文庫」の印記はないが、その書写は、同文庫の他のものと同じく、おおむね寛文―元禄の間と認めうる。大きさは30.0×21.0cm。表紙左肩に「堅横和歌 全」と記した細い題簽を附し、墨付十二枚。その内容は、

- 1 京極為兼沓冠、文字くさり（共に佐渡嶋配流中の作と）
 - 2 作者不知 源氏のゆふたすき
 - 3 東照宮之三十三回忌於弔哥薬師仏院（後水尾）御製十六首
 - 4 双六盤の哥 源順
 - 5 源氏六十三首之哥
- である。この中、今、2および5のみを、源氏物語に関する資料として、左に全文翻刻解説する。

- 一 源氏のゆふたすき
- (1) すみよしのまつに時雨のあらそひてかせのみさはくしく成らん
 - (2) ものことにみのりの月はちさとまでのとかにやとるかけをまつ哉
 - (3) しほきつむるせきやあらぬかせふけはもろきいかたのとたえするまで
 - (4) みかさやまをなし雲井のつきかけをくもらて過るしくれ成らん
 - (5) ふるさとのち草の露のはは分てかすそやまたにまつよひの月

- (6) したみゆるかすみのはらのあは雪のまつのは白きすかはらの里
- (7) かれぬればのはらにまよふちきりかなみしにかはれるもすの草くさ
- (8) とやまにはもみちしにけりかみなつきぬくたび過るしくれ成らん
- (9) しらさりしくめのいはかきつたひきにをなしながめにみねのしら雪
- (10) まくつはらかせふくよひのはなすゝきちるそ浪よるふかくさの里
- (11) すゑの露もろきなみたのしかのねにみ山かくれにふくあらしかな
- (12) まつしまやみきはのあしにゐるたつのをほくの浪にち世をへぬらん
- (13) ありしにはちりて残のかをとめてつきいるかたのはなをみる哉
- (14) かはつなくのさはの水をもる月のくもがれするかけそあやうき
- (15) しはの戸にかかるしら露とけ初てしつえに残るまつのしら雪
- (16) ふしのねのみねかとなひくしらくものもゆるけふりのすゑに有らん
- (17) ちはやふるをなしいかきにゐかなれはみしにもあらぬまさき成らん
- (18) はかなくもつゆにしほるゝからころもちきりしよはゝあ

きの七夕

(19) かりそめにくさのいほりをもる月ののきはに近きかやか
下をれ

(20) まくらよりしほ風さむみとまやかたかりねのみゆきしか
の山人

(21) すみかねてみをうき山にかくしつづくれにし春にまたあ
かぬかな

(22) まつよひのくもらぬ月のかけきよくみきはにやとるすま
のせきもり

(23) ふゆふかみをさゝか末にかせきえてのはらに迷ふしかの
しのひね

(24) しも結ふのきはのしのふかれにけりをなし浮世にふるわ
かみかな

本図は、写真に見られるごとく、「すまあかしもみちのかしる
かもとみをつくしふちはかま」(須磨・明石・紅葉賀・権本・
澤標・藤袴)の二十五文字を字母として、それを毎句の句頭に
据えた歌二十四首を、堅・横・斜の各様に記したもので、(1)・
(5)は堅(天↓地)、(6)・(10)は堅(地↓天)、(11)・(15)は横(端↓
奥)、(16)・(20)は横(奥↓端)(2)以下は斜である。

各歌の歌句の中に「みのり(2)」「せきや(3)」「く
もかくれ(9)」など巻名を詠み込んだものも見出されるが、大
部分は、その事もなく、歌の内容も、ことさら源氏物語の世界
に材料を得たと想定すべきほどのものでもない。要するに、右
の「すまあかし」以下の二十五字を各句頭におく歌を詠んだだ
けのものとおぼしく、中世における異巻名その他の材料となる

ものとも思われぬ。

二 源氏六十三首之歌

(1) なれぬれはたつに契つ聲をつて露のかことを言の葉にを
く

(2) もみちははきゝの梢におりかへて錦をあらふ秋の山かせ
あきちかき木の下露の待るゝは鳴空蟬のなみたなりけり

(3) みてもなをみるまくほしきゆふかほの花になれにし人の
振舞

(4) たつねきてゆかりをとへはむさし野の若紫の露ははかな
し

(5) ふみわくる山路の露にゝほひきて未摘花の色にひさしく
つきの夜はもちみの風にたなひきて錦をしける小野の山

(6) 里
(7) あたにちる花のゑんをはむすはずしと春の別は扱もかな
しき

(8) みしめなわかけてそいのるあふひ草神のめくみを□む
たふけもとの神の社の神葉に白木綿かけてみそきせんとや

(9) ふきをくる風をたよりのしるへにて花ちる里を尋ねてそ
とふ

(10) つきにねぬ須磨の浦人なれぬるか磯辺にたかく寄波の音
あきの夜の月影きえてあかしかに砂に白く露を置そふ

(11) みほさき道共いわしみほつくし霞にて渡る浦の松かせ
たれも又あわれとや見し蓬生の露の置野ののへにやすら

- ひ
 (16) ふしのねのすそのは晴て清見瀉岩屋に月の影はやとしつ
 つれて行雲井の鶴の一つかひ聲あわせたる暮のさひしさ
 あたる迄その香そしるき山里の松かせかよ宿のこふはい
 (17) 見わたせば花は尾上に顕てうす雲はるゝをちの山里本
 たえみするを哀とそみる朝がほの日影を待て露にしたかふ
 (18) ふくる夜の月に余波の乙女子か真木の下戸もさゝぬかり
 庵
 (19) つゆは玉かつらき山にみたれけりまたき色付嵐吹つゝ
 (20) あかすたゝ五月そ鳴けや蜀魂心尽しに待し初音を
 (21) 見えわかす小蝶は花にたくひつゝ桜ちりしく庭の遠方
 (22) たちわたるほたるのかけのうつろひて水に光のまさる玉
 (23) の井
 (24) ふしなれてとこなつかしき移香をいつ迄いもか袖にには
 (25) ひし
 (26) 月見れはたまきの桜ちりかゝり光やみかく風や行岸覽
 (27) あさきをのなかれのわきてひさしきは氷のむすふ冬の川
 (28) みかりはの狩場のみのゝ御幸に千代ふる里誰か行らん
 (29) たれか又来てもたとらむ藤はかまほころひにける心おか
 (30) まし
 (31) ふちまきは白波立て宇治川の河霧ふかく見渡すをや
 (32) 月影のかすめる宿の梅かえはおほろけあらぬ人そきて問
 (33) あら磯のきしへの岩に咲藤のうら葉を浪のあらふかわさ
 る
 (34) みよしのゝ芳野の草もたえせねは老せぬ身にも若菜摘也

- (35) たちわたる霞はかなしはかなくも飛きえて行鷹のひとつ
 ら
 (36) ふる里に初雁金のきてなかしはきは露吹秋かせそふくた
 つ
 (37) つてにふく少小夜更方の横笛の音の身にしむ独りねの床
 (38) 秋の雨しくるゝのへにすゝむしの声ふりすてゝ夜もすか
 ら鳴
 (39) 道もみえすすゑもはるかの夕霧に分まこり散よはぬ秋の
 山野へ
 (40) たくひなき弥陀の御法のふねうけてかの岸ちかくいつか
 渡らん
 (41) ふして見る夢まほろしの世中におとろかぬ身の程もはつ
 かし
 (42) 月かけの夜半いく度かわるらんあきはひまなく雲かくれ
 して
 (43) あたにちる花の香にほふ深山路にやすらふほとに暮ぬ春
 の日
 (44) 水上はなかれひさしき竹川の水にも千世の色や見るらむ
 (45) たゝこふるこふはひ香にも源ぞ深とそ念仏にそみてこく
 らくのそら
 (46) ふたつなき身をすてはてゝむは玉の法を尋し程の久しき
 (47) つるに又木葉ちりしく椎か本に通嵐の音そひさしき
 (48) あま人にちきりむすひしあけ巻のとけぬは猶も浦久し
 (49) 見し人の契たえせぬさわらひのおり／＼ことをとふそう
 れしき

- (50) たれかみし軒端の梅のやとりきて月に霞て花にしたかふ
 (51) ふりくらすよそ人つらし東屋のしくにかひなきぬるゝす
 みの香
 (52) つりをたれおきにたゝよふ浮舟の浮ねをそする淀の岩岸
 (53) あたにおく露のうき身はかけろふの有かなきかの世を厭
 はゝや
 (54) みのりせし書かわめたる手ならひのうき世の中のおも
 ひ出と云
 (55) 玉つきをかけて小路に見し夢のうき橋といらし夜半の初
 雁鷹
 (56) 月に吹風さむしろを打はらひ幾嵐のゝうらみきつらん
 (57) あわれ也軒端の竹に鶯の巢守と成し残るかい子は
 (58) 三河には雲手に水のなかるれば八橋かけて賑はしけ也
 (59) たまかつらかけておもひしさしくらに我黒かみのも泪す
 るらめ
 (60) おとをへて君にかたみの文なれば涙なかるゝ水茎の跡
 (61) 岩かかたみの文なれば涙なかるゝとしをへて山さかの
 ほるおいうとのとるやつまもこりはてぬかな
 (62) けさみれは小菊かのへの秋風に玉ちる露の数もしられす

此歌冠には弥陀をいたゝかせ身には源氏の目録をすへ口に
 は廻向の文を置思意趣を終に経たり

右の本文にはかなり多くの誤脱が認められる。主なものだけ
 いえばその第一は(61)の昌頭にあり、

岩かかたみの文なれば涙なかるゝ
 の一句は(60)の第二句「君にかたみの文なれば涙なかるゝ」
 の衍であろう。

つきに(60)の第一句「おとをつて」は、たぶん「ほどをへて」
 の誤写と思われる。跋文にもいう通りに、この一聯の歌は、
 初句第一字を連ねると

なもあみたふつあみたふつあみたふつ……
 の繰返しの形となるのであるが、(61)以降になると、

あ(57)・み(58)・た(60)・お(61)・と(62)・け

となり、(60)の第二字「お」は「ほ」でなければ通じないのであり、
 かくすれば、その歌意も通る。また(53)より(56)に至る間は
 あ(53)・み(54)・た(55)・つ(56)

となり、(55)と(56)との間に、「ふ」がなければならぬ。
 もとは、ここに一首入っていたのではなからうか。現在の形で
 は、前述の(61)の前半の衍を除いて総計六十二首であり、表
 題の六十三首に合わないが、ここに脱落一首を認めれば、もと
 は六十三首となつて、矛盾がないのである。

つきに、各歌には各巻名がよみ込まれている。

(1)「契つ声」におそらく「きりつほ」を含めているのであ
 ろう。「声」の右傍には不審紙が貼られており、何らかの誤写
 であること明らかである。(2)は初二句に「ははきゝ」、(3)
 は空蟬、(4)夕顔、(5)若葉、(6)末摘花、(7)
 第二句「もみちのか」、(8)花宴、(9)葵、(10)神、
 (11)花散里、(12)須磨、(13)あかし、(14)みほつくし
 (15)蓬生、(16)「岩屋」とあるが「関屋」の誤であろう

。歌意からも「岩屋」はおかしい。(17)第四句に「ゑあわせ」、(18)松風、(19)薄雲、(20)朝顔、(21)乙女、(22)初二句「玉かつら」、(23)初音、(24)胡蝶、(25)ほたる、(26)とこなつ、(27)三・四句「かゝりひ」、(28)二句「のわき」、(29)御幸、(30)藤はかま、(31)初二句「まきはしら」、(32)梅か枝、(33)藤の裏葉、(34)若菜(上)、(35)二句「はかな」(若菜下)、(36)三・四句「かしはき」、(37)横留、(38)鈴虫、(39)夕霧、(40)御法、(41)まぼろし、(42)雲かくれ、(43)二・三句「ほふみや」、(44)竹川、(45)紅梅、(46)三句に「むは玉の」とあるが「むはそく」の誤であろう。(47)椎か本、(48)あげまき、(49)さわらび、(50)やとりき、(51)東屋、(52)浮舟、(53)かけろふ、(54)手ならひ、(55)夢のうき橋、(56)さむしろ、(57)巢守、(58)八橋、(59)三句に「さしぐら」とあるが「さしぐし」の誤であろう。(60)三・四句「はなみ(花見)」、(61)二句「さかの」(嵯峨野)。(62)この歌では何を巻名としてよみ入れたものか不明である。「玉ちる露」の語に「山路の露」を連想させたものかとも想像は動くが、それも不確かである。

さて、右の巻名とその配列順位について、注目すべき諸点をあげる。

- 1 若菜巻を二巻に分けていいること。
- 2 「雲かくれ」を算えていること
- 3 (44)竹川・(45)紅梅と、逆順になっていること。
- 4 「橋姫」の代りにその異名「うばそく」を採用している

こと。

5 統篇名として、「さむしろ」「巢守」「八橋」「さしぐし」「花見」「嵯峨野」を挙げていること。

1の若菜を二巻に分けることは、いうまでもなく何ら取りたてていべきほどのことではない。初期における巻名目録は、白造紙、伊行尺・奥入等すべて、「廿若菜」とするのみであるが、しかし平安末から鎌倉へかけての有力古写本は例外なく上下両巻に分っており、もともと若菜は一巻一冊とするには量が多すぎるのである。二帖に分けて、各帖から一首づつ歌を作る原則に則っただけのことにはすぎない。

2 通行紅梅―竹川の順が、逆に竹川―紅梅の順となっている例は、古く聖覚の源氏物語表白にもあり、両巻の年立の内容からして、薫の年令を基準とし、竹河―紅梅の順にすべしとは、宜長の主張である。事の当否はともかくも、本書が聖覚以来の古い一説に随っているのは注目すべきである。

3 「雲かくれ」を一帖にかぞえているのは、白造紙が「廿クモカクレ」と記し、また釈は「廿五 まぼろし、廿七にほふ兵部卿」とあって、雲隠れを認めているらしいのであって、古くからのことである。

4 橋姫の代りに「優婆塞」を挙げているが、先例としては、聖覚の源氏物語願文や大島本源氏物語がしかりである。又、奥入には「廿八 優婆塞一名橋姫」と記している。平安末期には、かなり有力な巻名だったのである。

5 この「さむしろ・すもり、八橋、さしぐし・花見・さが

の」の巻名は、いわゆる「すもり六帖」といわれるものの巻名に一致する点が多い。「すもり六帖」は、書陵部の源氏秘義抄・大乗院寺社雜事記・永正本源氏系図・太宰府天満宮本「源氏論義」附載「源氏目錄次第」等に見える巻名で、その内容は「すもり・やつはし・さしぐし・花見・さがのみや（単ニ「さがの」トモ）」である。本書はこれに比して、すもり六帖では二帖である「さかの」が一帖であり、「さむしろ」が別に加っている。もし「さむしろ」と「さかの」の中の一帖とが同内容で両者が異名にすぎないのならば、本書の六帖は「すもり六帖」と一致するわけである。「さむしろ」は、白造紙に桜人、巢守と共にあげられ、書陵部蔵源氏古系図、源氏古鈔（天文十年九月の識語あり）にも、後人の擬作として名に見えるものである。又拾芥抄では東屋のつぎにその名をあげている。しかしその内容は全く知り得ない。

しかし、「さむしろ」と「さかの」とはたぶん別のものではあるまいか。直接的な確証があるわけではないが、いささか参考すべきものが他にある。松平文庫本「光源氏一部哥」の第八冊幻卷々末に、

廿六の巻より廿八・卅並二帖以上六てうは宇治の宝蔵にこめられしゆへ也、雲がくれともをしあてにこそ申せみたる人なし、すもり五帖・桜人二帖・嵯峨野三帖以上山路の露十帖は也などと云ものちにつくりそへられたる本也、それもいまは世にわたらず、

とある。この本は享徳二年祐倫の識語を有する天正十四年の写本である。

右の文意について、さらに解説すれば、この本の巻名目録には
(前略)

廿四 御法

廿五 幻

廿七 薫中将此巻匂兵部卿の宮ともいふ

並 紅梅

並 竹川 (以上第八冊扉)

宇治十帖之内

一 橋姫

二 椎本

(下略) (以上第九冊扉)

と記しており、右にいう「廿六の巻より廿八・卅並二帖以上六てう」とは「雲隠」と、竹川に続き、橋姫に先行する巻名未詳の廿八・廿九・卅・並一・並二の五帖、合わせて計六帖との意でそれがいわゆる雲隠六帖であり、今は宇治宝蔵に籠められて、見るを得ないというのである。又これと同趣旨のことが、同じく祐倫の文安六年(一四四九)の著作である山頂湖面抄にあり、二十六雲隠より末六帖は次第不同宇治の宝蔵ニ被籠テ今世

二不渡

という。又、右に続く「すもり五帖・桜人二帖・嵯峨野三帖以上山路の露十帖」と、この宇治宝蔵の雲隠れ六帖とが別物であることも右の文面からみて確実である。またこの「山路の露十帖」の呼称も問題であり、一般には、「山路の露」といえば、同名の一卷の源氏物語統篇名を指すと考えられているのであるが、この記事によればすもり、桜人、嵯峨野の計十帖の総称で

ある。また、すもりが五帖・桜人が二帖、嵯峨野が三帖というのも他見のない帖数である。この「すもり五帖」が前述の「すもり六帖」といかなる関係にあるのか、また一卷といわれている桜人がここで二帖と算えられ、上下二巻とされている嵯峨野が三帖と算えられるのもどういうことか。しかもこれらがすべて、雲隠れ六帖以外のものであるというのであるから、源氏五十四帖以外の統篇・擬作の類は、伝説的なものも含めれば、「光源氏一部哥」だけでも十六帖に上る計算となるわけだ。私は

かつて「八・九篇またはそれ以上にも上る統篇の巻々が平安期において作られ、その中から、人々はたとえ自分の好むものをとって六十巻に仕立てていたというような事情ではなかったであろうか」（拙著「源氏物語の研究」305P）と述べたことがあるが、右の「光源氏一部歌」の記述は、その事を暗示しそうに思う。「源氏六十三首歌」中に、いわゆるすもり六帖中の五帖しかその名がなく、他の一帖は、「さかの」ではなくて「さむしろ」であることも、右のように見れば、必ずしも、これを通常の「すもり六帖」にひきつけて解する必要はあるまい。「光源氏一部歌」でも「すもり五帖」の文字は見えるのであるからそのまま受けとっておいてよいであろう。

そして又、前述の如く、(55)と(56)との間に「ふ」を冠とする一首が脱落したものと推定すれば、当然ここにも一卷名が追加されるわけであり、また末尾の巻名未詳の一首(62)にも何らかの巻名が詠みこまれていると考えれば、こども一巻名を追加想定せねばならぬ。とすれば、要するに本書の巻名は、通行全巻名五四に加えて、若菜を余分に一帖加算し、さらに、す

もり以下の五帖と、さむしろ一帖、帖名未詳一、脱落分一帖計六十三帖名となる。そしてこのばあい、同巻にして帖が重出することは、「橋姫」がなく「うはそく」のみあげている例からしても、否定されようし、この帖名数はそのまま帖数に置き変えることができるのではあるまいか。中世に於いて、例外的にしろ源氏物語正統六十三帖という形があったことを、本書は示すものと云えるであろう。

源氏物語巻歌とか巻名歌と称するものは、世に少くない。各巻の巻名を一首づゝの歌に詠みこむ風習は、古くからのもので池田亀鑑氏も源氏物語大成巻八、328P図版に、定家、花山院長親、実隆らにその事があったことを指摘され、源氏物語大成巻七・216Pには、耕雲本跋歌も翻刻されている。また類従三一九所収源氏物語竟宴記（永祿三年十一月）にも、公案以下によって巻名歌が詠まれており、寺本直彦氏「光源氏巻名歌について」（国語と国文学）昭和三四年一月）には、伝定家作の巻名歌について詳述されている。しかし、いずれも、本書とは関係なく又、他に六十三首歌のあることをきかない。本書が統篇資料を豊富にもち、しかも、各巻につき一首ずつの歌を伴っていることは、今後の研究にも軽視し得ないことではなからうか。

〔注〕①

この本のことについては、拙稿「松平文庫本『光源氏一部歌』翻刻上・中」（『文学研究』六二輯・六四輯）、稲賀敬二氏「源氏物語の研究」を参照されたい。